エマソンとメルヴィル

先行者への意識

野田　明

エマソンがメルヴィルに及ぼした影響として客観的に知られていることはあまり多くない。『信用詐欺師』の登場人物がエマソンを基にしていること、メルヴィルがエマソンの講演を聞き、エッセイや詩を読んだこと。これらはほぼ事実である。メルヴィルは試作に転じたから、詩人としてエマソンからどのような影響を受けたかは別途論じられなければならないが、そうは言っても、メルヴィルが作家としてエマソンから受けた影響は、遺作の『ビリー・バッド』においてもその作品に言及したホーソーンに比べれば、少なくとも記録に残っている範囲では小さいように思われる。その一方で、この二人の作家は、先行するテキストからの引用、柔軟なジャンルの横断、混合という点では共通するものを持っていた。このことも踏まえて、メルヴィルとエマソンの関係を見直したい。

従来、メルヴィルはエマソンの冷たさ、認識の浅さを批判し、そしてそれはもっともだとメルヴィル研究の側からは思われてきたが、実のところ、メルヴィルはどの程度エマソンを理解できていたのだろうか。『信用詐欺師』において、メルヴィルは信用詐欺師コズモポリタンと神秘論者マーク・ウィンサムを問答させる。

> "If I were a rattle-snake now, there would be no such thing as being genial with men—men would be afraid of me, and then I should be a very lonesome and miserable rattle-snake."
> "True, men would be afraid of you. And why? Because of your rattle, your hollow rattle—a sound as I have been told, like the shaking together of small, dry skulls in a tune of the Waltz of Death. And here we have another beautiful truth. When any creature is by its make inimical to other creatures, nature in effect labels that creature, much as an apothecary does a poison. So that whoever is destroyed by a rattle-snake, or other harmful agent, it is his own fault. He should have respected the label. Hence that significant passage in Scripture, "Who will pity the charmer that is bitten with a serpent?"
> "*I* would pity him," said the cosmopolitan, a little bluntly, perhaps.
> "But don't you think," rejoined the other, still maintaining the passionless air, "don't you think, that for a man to pity where nature is pitiless, is a little presuming?"　(*The Confidence-Man* 1044-5)

ここでコズモポリタンは自然の中に存在する悪なる行為者（ガラガラヘビ）の存在と、それによって噛まれた者への同情を言う。対するウィンサムは自然はガラガラヘビが危険であることをラベル（ガラガラという音）によって知らせているのだから、噛まれた者が悪いと言い返す。確かにウィンサムの見方は冷たい。

実態はどうなのだろうか。メルヴィルがウィンサム（エマソン）を、口では立派なことを言っていながら肝心な時には冷淡で、passionless な人物として描く背景には、エマソンにはメルヴィルの捕鯨に相当するような、命のやり取りに関わるような経験がなかったことがあるかもしれない。しかし、エマソンにも、間近に「死」に接する機会が、いわばガラガラヘビに噛まれたことがあった。それは息子の死である。エマソンの長男ウォルドーは猩紅熱のために 5 歳で亡くなった。ただ、エマソンは息子の死による衝撃を簡単に分かる形では表現しなかった。ウォルドーの死を契機として書かれた詩「挽歌」は、前半は愛する者の死を比較的素の言葉で語っていながら、後半の 3 連は「深い心」が「私」に向かって自然の摂理を説き、いつまでも悲しみに拘泥していてはならないと教える、かけがえのない子どもの死でさえ、自然全体の法の中で納得したかのような形で終わる。また、エッセイ「経験」では 2 年前の息子の死について「私は美しい地所を失ったように思える。それだけだ。」とも言い切り、さながらマーク・ウィンサムを地で行くようである。エマソンが残した日記に基づく最近の精緻な研究によって、エマソンが決して息子の死を容易に受け入れたわけではないこと、いかにそれがエマソンにとって大きな喪失であったかがわかっている。むろんメルヴィルには現代の研究者が手掛かりとする日記などの資料を参照する術はなかった。しかし、実のところエマソンは「経験」以外のエッセイにも、子どもの死に関わるテキストを織り込んでいる。メルヴィルも読んだはずのエッセイ「詩人」の一節を見ておきたい。

Nature, through all her kingdoms, insures herself. Nobody cares for planting the poor fungus: so she shakes down from the gills of one agaric countless spores, any one of which, being preserved, transmits new billions of spores to-morrow or next day. The new agaric of this hour has a chance which the old one had not. This atom of seed is thrown into a new place, not subject to the accidents which destroyed its parent two rods off. She makes a man; and having brought him to ripe age, she will no longer run the risk of losing this wonder at a blow, but she detaches from him a new self, that the kind may be safe from accidents to which the individual is exposed. So when the soul of the poet has come to ripeness of thought, she detaches and sends away from it its poems or songs,ー a fearless, sleepless, deathless progeny which is not exposed to the accidents of the weary kingdom of time: a fearless vivacious offspring, clad with wings(such was the virtue of the soul out of which they came), which carry them fast and far, and infix them irrecoverably into the hearts of men. (“The Poet” 190, 下線は引用者)

ここでエマソンは、「ある詩人（a certain poet）から聞いた話」として話者を変えながら、自然がいかに生き物をちゃんと世話し、全体として種を保っているかを語る。最初は自然、植物の比喩から、やがて詩のこと、詩人の心の話に移行するこのくだりで、エマソンは、直接ではなく、「ある詩人」の声に仮託する形で、自身が息子を失った経験を語っているのではないだろうか。3 度繰り返される accidents という表現、losing this wonder at a blow という言い方。きのこの話は気がつくと人間のことになっている。Parent は後段から遡って考えれば、詩に対して「親」であるところの詩人、ないしは個々の人間の肉体と、比喩の次元では解釈できる。しかし同時に、この仮託された話の中で、親と子は入れ替わっているのではないだろうか。ここには、父親として息子の命を守ってやれなかった無念と、その代わりに、せめて子どもの魂が詩になって永遠に生きてくれるようにとの、現実には叶わない夢が書かれているように思えてならない。猩紅熱に感染さえしなかったら（2 ロッド離れていたら）、死なずに済んだのである。息子より、自分が代わりに死んで（destroyed）たらよっぽどよかったのにと、親なら誰だって思うことを、エマソンも思ったのではないだろうか。

そのように読めば、上の『信用詐欺師』の引用部で無神経なのはむしろメルヴィルである。10 年以上経っているとはいえ、子どもを流行り病で亡くした人をネタにしてよくこんな場面が書けると思ってしまう、とは、メルヴィルがエマソンの身に起こったことを知らなかったとしたら、メルヴィルに酷かもしれない。それにしても、メルヴィルは案外エマソンを読めていなかったのではないだろうか。「ホーソーンとその苔」でホーソーンの作品について言う、「上っ面だけを読む者をしたたかに騙す」はエマソンにも当てはまるかもしれない。

よしメルヴィルのエマソン理解に不足があったにせよ、エマソンが息子を失ったことによって一層成長させた表現者としての特質は、メルヴィルも共有し、受け継ぐものとなった。エマソンが詩を自然の一部と考え、死んだ息子の魂を詩の中で永遠に生きさせようとするとき、その願いはインターテクストの促進となって表れる。自然のあるところで失われたものが別の場所で見つかる、個々の作品や形式に囚われない自由な躍動、詩と散文の交流。（ここでは省略するが、『代表的偉人論』中の「シェイクスピア」にも、エマソンの亡くなった息子への気持ちを思わせる箇所がある。）さらに、「詩人」の引用部で、エマソンがその部分だけ話者を変えたことも注目される。隠すためというより、二重のペルソナを被らないことには語れなかったのだろう。この、話者を変え、挿話にすることによって、その中でかえってもとの語り手の真実が語られるということは、メルヴィルが『信用詐欺師』で自家薬籠中のものとした手法である。『信用詐欺師』の引用部は、エマソンを意識し、反発したことが『白鯨』に影響を与えたということの痕跡ともとれるが、そればかりか、同じ個所はメルヴィルの後の作品、『ビリー・バッド』への言及でもある。そこでメルヴィルは「ヘビに噛まれた者」、ビリーを主人公とし、「孤独で惨めなガラガラヘビ」である人間、クラガートの心に測鉛を下す。メルヴィルがもしかしたらエマソンを誤読したこと、その悲しみ、苦しみを十分読み取れなかったことが、あるいは『ビリー・バッド』創作に影響を与えたかもしれない。『ビリー・バッド』を執筆しながら――その時、メルヴィル自身も息子に先立たれていた――ホーソーンのことだけでなく、30 年前に『信用詐欺師』でエマソンを批判したことも思い出していたかもしれない。

参考文献

Emerson, Ralph Waldo. *Collected Emerson's Prose and Poetry*. Edited by Joel Porte and Saundra Morris, A Norton Critical Edition, 2001.

Melville, Herman. *The Confidence-Man: His Masquerade*. Library of America, 1984.

---. “Hawthorne and His Mosses” Library of America, 1984.

堀内正規　『エマソン―自己から世界へ』　南雲堂、2017 年.